

## はじめに

原爆症認定集団訴訟が始まってから10年が経過し、集団訴訟としてはようやく終わりを迎えました。

本書は、東京で集団訴訟がどのように取り組まれ、どうやって闘われたか、その成果は何であり、どのような課題を残したかを明らかにするために、しかもできるだけ多くの方たちに、気軽に手近にとって読まれることを期待して編集されました。

内容としては、最初に弁護団事務局長が東京での訴訟の流れを中心に、大まかな取り組みと経過を紹介しています。資料編の「年表：原爆症認定集団訴訟をめぐる動き」を見ながら読んでいただければ、この間、いかにさまざまな活動がなされたかが理解されるはずです。

次に、この訴訟を支えた東京都原爆被害者団体協議会（東友会）と、この訴訟に関わった弁護士、それに原爆裁判の勝利をめざす東京の会（東京おりづるネット）の皆さんにお集まりいただき、座談会をもちました。

集団訴訟を進めるために東友会がどのような役割を果たしたか、運動団体がこれをどう支えたかは、それぞれの座談会を読むことで、お分かりいただけるものと思います。また、弁護団会議は全員が揃って行なうのが原則ですが、座談会では30名近くが一堂に会して行なうのは難しいのと、入団時期も年代も大きく異なることから、3グループに分かれて、それぞれ語ってもらうことにしました。そこでは、それぞれの弁護士がどのような経緯で弁護団に参加し、具体的に何を担ったか、また弁護団活動をする中で、何を感じ、何を学んだかが率直に述べられています。なお、限られた時間内で語り尽くせなかったことについて、座談会とは別に、原告団長、東友会会長、事務局と弁護団員に手記を書いてもらいました。これらを読んでいただくと、改めてこの裁判にかけた各人の考えや思いが理解されるはずです。

さらに、この訴訟の主張・立証を支えていただいた科学者・医師の皆さん、それに被爆者に対し深い理解をもって各党で中心的に動いてくださった政治家の皆さんにも、お忙しい中、手記をお寄せいただきました。医師団の支えがなかったら、裁判で勝利を勝ち取ることは不可能であったと思われるし、政治家の皆さんの協力によって政治的にも行政的にも一定の前進が図られたことは間違いありません。

そして何よりもこの裁判を前進させ、大きな勝利を得ることができたのは、被爆者である原告本人の皆さん方であることは言うまでもありません。それぞれが、重い病気を抱える中、訴訟に加わるだけでも大変であったと思われるが、弁護団の求めに応じ、記憶の底に閉じ込めていた恐ろしい被爆体験を思い出し、長い間の体調不良や、現に苛まれている病状について、克明に語っていただきました。裁判のためとはいえ、それが如何に過酷なものであったか、私たちの想像を超えたものがあったことは間違いないと考えます。

そうした原告の皆さんの報告書や証言などは、二度と語られない、歴史的にも貴重な記録であることから、できればその全部を掲載したいと考えましたが、頁数との関係で裁判官に向かって直接に訴えられた意見陳述に限って載せ

ることとしました。

巻末資料編に、三次にわたって闘われた裁判の全原告について、被爆状況や病状、それに判決の結果などの一覧表を掲載しました。各判決要旨と私たちの声明も掲載しました。それらもご参照いただきたいと思います。

裁判で最も大きく困難な課題は、遠距離・入市被爆者、とくにいわゆる低線量による内部被曝者の放射線と、さまざまな病気との因果関係でした。国はこれを徹底的に争い、最後まで被害を小さく、狭く閉じ込めようとしたのですが、裁判所は新たな知見を重視し、原告弁護団の主張・立証を前向きに評価し、国を敗訴させました。それでなくても勝訴が困難な行政訴訟で、このような高い見識を示した裁判官たちに、改めて敬意を表したいと思います。

なお、裁判の内容については、原告弁護団が心血を注いで起案した訴状・準備書面と各証人の証言調書、それに判決全文を読んでもらうことが重要ですが、それらを掲載するとなると何千頁を要することから、残念ながらもいずれも割愛せざるを得ませんでした。興味のある方は、東京の判決については東京高裁判決が裁判所ウェブサイト「裁判例情報」で検索できますので、ご覧ください(2009年5月28日、平成19(行コ)137)。

本書は、原爆というものの残酷さと、それが人間にもたらす悲惨さを一人でも多くの皆さんに知っていただき、一刻も早い核兵器廃絶に繋げたいという思いも込めて企画されました。その矢先、昨年3月11日に福島第一原発事故が起こり、低線量・内部被曝が国民的な関心を集める一方、核兵器と同じように原子力発電の危険性が浮き彫りになりました。これを一日も早く停止させ、脱原発を実現することも焦眉の課題となっています。

本書が放射線の恐ろしさを考える市民の皆さんに、そして法律家になって安心・安全な社会を作るために役立ちたいと考えている大学生、法科大学院生や修習生など若い皆さんに、一人でも多く読んでいただくことを切望します。

最後になりましたが、集団訴訟を闘ううえで、法廷傍聴はもちろんのこと、さまざまな運動に参加していただいた原告以外の多くの被爆者の皆さん、それに被爆者を支え励ましていただいた多くの皆さんに、心から感謝を申し上げます。

#### 2012(平成24)年3月 東京原爆症認定集団訴訟を記録する会

東京原爆症認定集団訴訟を記録する会は、東友会、原爆症認定集団訴訟東京弁護団、東京おりづるネットで構成しました。

原爆症認定集団訴訟の記録集としては、同記録集刊行員会が編集した『原爆症認定集団訴訟 たたかひの記録 明らかにされたヒバクの実相』(日本評論社刊)という書籍が上下2巻(第1巻 報告集、第2巻 資料集)にまとめられ、出版されています。同書は総頁数が1100頁を超える大著で、大江健三郎氏が「比類のない(しかも読みやすい)偉大な本」という推薦文を寄せており、活動を映像で纏めたDVDが付録についています。定価は15750円ですが、訴訟の全

体を正確に知りたいと思われる方には、是非とも読んでいただきたい記録集です。

なお、被爆の実相、被爆者の長年にわたる闘いの記録として、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)編『ふたたび被爆者をつくるな—日本被団協50年史』(あけび書房刊)が刊行されています。同書は、本巻(定価7350円)と別巻(5250円)からなり、本巻は原爆地獄の実相、被爆者のその後の痛苦、被爆者の闘いの記録・ドラマが収められており、別巻は貴重な資料を収録した資料編、詳細な年表で構成されています。後世に遺すべき貴重な大労作です。

また、東京関係については、東友会が同会編『座談会をつづる東友会の50年』(頒価1500円)を出版しています。本書とともにお読みいただくことをお勧めいたします。